

蒼に浮かぶ鱗

満

昏く黒い海に溶けた夜闇の裾は、まだひかれはしない。
丸く青白い月は墨を流したように黒い水面に 映りこみ、
仄かに海の蒼を浮かび上がらせる。
きつと、恋をしたのだろう。

その光の円の中心に肩から上を出し、 凧いだ海に揺蕩たゆた
う彼女はぼんやりと考えた。
空が海に恋をして、海が空に恋をする。

互いがおおいのはそのためで、しかしどちらも染まれない。
それを融かして陽は墜ちて、ようやく夜に触れあい、
融ける。

一時の逢瀬、しかし朝が来て、夜が来て、廻る繰り返し。

たとえどんなにその手を合わせようと、その指をからめようと、それは解かれる。そしてそれ故に、より、強く。

(……なんて、ずいぶんと馬鹿らしいことを考えているわね)

自嘲するように、その口は歪んだ。
夢でもみたいのかしら、眩き、ひとつ溜め息をつく。

今日はもしかしたら本に熱中したのかもしれない、頭の隅で勝手に責任転嫁するが、内心では本の所為でもなんでもなく、ただ自分の性分の所為だと知っているため、所詮は意味のない行為である。

(なんだったかしら……)

こんなにも感傷的な理由を探そうと今日あったことを思い返そうとするが、霧が出たように頭はぼんやりと白い霧を見せるだけだった。

いつもそうだ。

彼女がこうして夜の水面から顔を出し、凧いだ海に揺られる時はいつも、彼女の中には幻想と言い知れぬ感情だけしか映るもの、否、映ることができないものがない。

その日の出来事、其処に在る理由、何を思おうとしても脳に霧が出て白い霧しか見えなくなる。

(それにしても、今日はひどいわ……)
きゆう、と持ち上げた片手を胸に当て、押さえるように力を込める。

いつにも増して、おかしい。

浸食していく焦燥、突き破るような鼓動。

は、とわずかに荒くなった呼吸がささやかな波音に重なる。

眉を顰めれば視界が歪む。

なきたいとも言おうのだろうか。

(帰ろう)

まるで恐れるように、彼女は身を翻す。月の光に鱗が銀に煌めいた。

冷えきった肩に、夜の海の水は温かかった。

*

じつとりと肌に纏わりつくような暑さが恋しいこともあるが、実際にその状況下にある今となれば何を馬鹿なことを、と口汚く罵ってしまうのは仕方のないことだ。

汗ばんだ額を手の甲で拭って一つ息を吐いた水姫みずきは考えた。恋うたのはいつだったかなどわかりはしないが、ともかくにも、そんなことを考えるなんて。そう思いつつもいつかは再び恋しく思うのだろうことがわかりきっているため、なんともやるせない。

(はやく終わらないかしら・・・)

こんな補習授業なんて取るんじゃないかと、どうでもよい思考を打ち切った途端に後悔が湧きあがり、再び吐きそうになる溜め息をぐっと飲み込む。教師が見ていることに気づいたのだ。慌てて視線をノートに落とし、別にわからないわけでもないが問題に悩んでいるふりをする。

(なんだか滑稽ね)

明日からはサボってやろうかしら、そうは思ったところで結局来てしまうのだろう。サボる余裕も、ましてや勇気なんてそんなもの、ない。

そうやって生きていくのだろう、思うと一つ鉛が腹の底に沈む。眉を顰めても一度滑り出した思考は止まりはせず、水姫は時計に視線を投げ遣った。

過剰な期待を寄せる父、臥した母。兄達のいなくなった家は影が落ちたように静かで、仄昏い。箱に入れて育てられたような父はあまりに強く、典型的な亭主関白がまかり通る。例えば息苦しさを感じようとも、その意見に反意を持つとも、逆らってもせず逃げ出しもせず。それがもはや暗黙のルールである。

かちり、長針が揺れる。

くるりと先のまがった睫毛を伏せて目を閉じれば、授業の終わりを告げる教師の声がする。

(……………写さなきゃ)

緩慢な動きでペンに指を伸ばし、教師がいなくなっ
て見やすくなった黒板を書き写す。ざわめく教室に、水姫に声をかける者はいない。友人はみな補習なんてもの取っていないのだ。

ふ、と息を吐く。ゆれる、薄く汚れたカーテン。

カタリと小さく音を立てて席をたつころには誰もお

らず、蟬の狂ったような声が遠く響く。

静かだ。

熱気すら忘れそうな静けさに、水姫は再び目を閉じる。静かな教室は好きだ。そして、夏も。

どうしようもなくさみしく、切なくなる。胸を焦がすような、泣きたくなるような。じつとりと肌に纏わりつくような暑さが恋しくなるのも、呼吸を奪われそうなのほどの衝動と、頭を侵す熱と。

苦しいはずなのにどこか愛おしい、故に、恋うる。

(……マゾヒズムかしら……)

口元に上った自嘲に水姫は瞳を開き、教室を後にした。

(あ……またいる)

ぼんやりと廊下を歩いていると、一つの窓に目が行く。それはもう何度目かもわからず、すでに自然なことになりかけている。

三階の端、ひっそりとした、広い教室。窓が開いているためひらひらと揺れるカーテンの隙間から垣間見えるキャンパス。その向こうに座る少年と青年の狭間を彷徨うような男の子。

一度廊下ですれ違った時に盗み見た長い長い睫毛を伏せ、口を一文字に結んで、細い細い面相筆で絵の具をキャンパスにのせていく。どうやら水姫の学校の美術部

は幽霊が多いらしく、まして夏休みに描きに来るのは全年合わせても両手で数えられるほど、下手すると片手でもあまるほどだと聞いたことがある。真偽のほどはわからないが、少なくとも水姫は最近まで、美術室に人がいるのを、授業を除けばほとんど見かけたことがなかった。水姫にとっては好都合だが。

今はもう変わってしまったが、美術の担当は講師のため常駐ではなく、また老年ですべての時間の流れがゆっくりで物静かなおじいさんだった。そのため生徒の中にはその存在すら認識していない者もあったのだが、水姫はこの老教師が好きだった。入学当初に学校の廊下で見た彼の絵がひどく気に入って、なんとなく好感を持ったのが始まりだった。

それ以来、廊下で挨拶をしたり絵を見せてもらいに行くうちに、放課後に遊びに行くや紅茶を出してくれてぼつぼつと話をしたり、たまには別の仕事用らしい、絵を描くのを眺めながら宿題をしたりする程になったのだ。その空間の、なんと穏やかであったことか。

しかし水姫が二年生になった今年、やめてしまった。理由はわからないが、とにかく突然に、やめた。今年からはクラス持ちの教師が美術を担当しているため、おそらく何かの理由で美術教師が抜けた穴を埋めるつなぎ役だったのだろう。

とにもかくにも彼はもういない。だから今年になって

から水姫は美術室に行っていない。代わりに廊下から眺めて、そうしているうちに彼を見つけたのだった。

いつも窓際にイーゼルを立て、十号かそこらのキャンバスを掲げる。

(つて……)

ぼんやりしすぎたようだ。いつの間にか水姫は美術室の前にいた。

たかが一年されど一年、とでも言うのか、一年間殆んど毎日通い詰めた足は、うっかりするとこうして美術室まで水姫を運んでしまう。これまでも何度かあった。

ドアが開いていて、カーテンを揺らして窓から入った風が水姫の頬を撫ぜた。

(久しぶり、だなあ……)

いつもはドアが閉まっているため中が見えないが、棚から出ている石膏も、置かれているモチーフも。当然のように変わってしまった。

まるで知らない空間に、思わず水姫は顔を歪め俯いた。カタ、小さな音がする。

目を瞬かせながら顔をそちらへ振り向けると例の男の子と目が合った。

くせ毛らしい、先がくるりとしてあちこちに跳ねるつやつやと黒い髪。

窓からさす光に透き通り、銀に光った眼。

驚いたように睫毛で縁取られたそれが一瞬、丸く開か

れた。

え、と声を漏らした水姫に、既に表情を失くした彼は歩んで寄った。

「……何か？」

低い、ゴロゴロとした声に空気が震える。

はっとして水姫は焦った。先刻は光を反射していた瞳が、その黒い黒い円に水姫を映している。その円に、水姫の脳裏がちかりと光る。

その表情は怪訝さを隠さず、眉もわずかに寄っている。もう一度さっきの色が見たいかもしれないな、その表情をよそに瞳の黒を見つめる水姫は頭の隅で思った。

「……先生、なら。……いないけど」

「あ……そう、ですか」

ぼうつとしていると、声が降ってきた。

彼は意図していないだろうが、水姫は一瞬、あの老教師のことを言われたのかと思った。

何故か逃げ出したい衝動が湧きあがり、すみません、頭を下げると踵を返して水姫は廊下を走り去った。

*

今日も、頭には靄がかかっている。

何も映らず、気がつけばまた月の影に肩を出して、波に漂う。

(……陸が、近いのね)
いつもは辺り一面海だったような気がする。それすらも定かではないが、しかし不安も違和感も何もない。なんとなく、月の影から出て近くにあった岩に背を預けてみる。

(大分、痩せてきたわね……)

月を眺めて、おもう。

満月だったはずの月は既に欠けはじめ、彼女が浮かぶ

その青白い影も欠けていく。

(空に喰われているのかしら、それとも……?)

回りは始める思考、しかし今日は——違った。

「誰……?」

映った影、衣擦れの音。彼女はゆっくりと振り返り、その姿を認めると、問うた。

「……きつ、ね?」

背を預けた岩の上。

セルロイドの白い、狐の面。額と頬に朱色の模様が

入ったそれを被って彼はいた。

「……どうして、海に……狐?」

何故だろう、なんだかとても似合わないように彼女は感じた。

「……狐だって、海は好きだ」

響く、揺れる、低い声。

思わず眩暈を覚える既視感、しかし頭の靄の向こうが光るだけで。

「そう、よね……ごめんなさい」

恥ずかしく思い、目を伏せて言う彼女に、彼はいや、とだけ返した。

「……さむく、ないのか」

降りた沈黙を破って彼が問う。

しかし外気よりも、水中のほうが温かい。

首を振ると彼女はそう答えた。

すると、面に隠れて見えないはずの表情が曇った気がした。

そのことに驚いて彼女が目を見開くと、彼はすつと白い手を差し出した。

「……ッ」

ふれる、熱。

頬に触れた指先は、じんわりとそこから浸食する。

「こんなに、冷たいのにか」

責めるわけでもなく、告げる声。

揺れる、響く。

一瞬、ほんの一瞬だけ面の下の瞳が垣間見え、その銀に靄の向こうがまたちかり、光った。

「……あ」

思わず歪む顔、恐れは身を冷やす。

呼吸を忘れたまま彼女は身を翻し、その鱗を煌めか

せると、ばちゃんと海へ潜り込んだ。

*

蝉は相も変わらず、否、以前よりも勢いを増して鳴き狂う。

それを聞きながら、水姫はまた廊下を歩いていった。

(ねむい……)

知る限り就寝時間は他の生徒たちに比べれば早いはずなのに、水姫はここ数日、ひどく睡魔に襲われていた。正確には、先日美術室へ行ったあたりから。

(なんなのかしら……)

眠気の所為で聊か不機嫌な水姫は一人、むうと口を尖らせた。

ふ、とまた視線を投げて、美術室を見る。

すると、やはりとでもいうべきか、彼が絵を描いていた。

ぼんやりと立ち止まって見つめる。

パレットで熱心に絵の具を混ぜてはキャンバスに合わせ、しかし気に入らなかつたのか眉を寄せて絵の具のチューブを漁る。

(何の絵を描いているのかしら)

ぼんやりとしたまま考える。なんとなく、あの老教師のような絵だったらいいと思った。

と、ぼんやり見つめていた視界でちらちらと何か動いてはつとずる。動いていたのは——手だ。彼の、手。

(呼ばれている……?)

首を傾げるともう一度、揺れる。

室内部だからか、それとも色素が薄いのか、日陰で揺れるその手は白く見えた。

はつとして小走りで美術室へ向かう。

もともと暑さでうっすらと汗をかいていたが、そのせいで服が張り付く程度になった。

「あんたさ、先生のアトリエ知りたい？」

走ってきたことに驚いたのか戸口で筆を持って遊びながら待っていた彼はきよとんとした後小さく笑って唐突に聞き、今度は水姫がきよとんとする番だった。

「知りたいだろ？」

「あ、う、うん！」

慌てて返すと、それにもふ、と小さく噴き出されて水姫は思わず恥ずかしくなり、頬に熱が集まった。

「俺、知ってるからさ、……これやるよ」

差し出された、小さく折りたたまれた紙を開くと、少し癖のある文字。

捲った袖から覗く腕は、白さとは反対に逞しく、うっすらと汗を滲ませていた。

「これ……」

「先生の家。……あんた、仲良かっただろ、先生と」

ぽかんとしている水姫に、筆を弄びながら目を細めて彼は言った。

伏せた睫毛に瞳の黒が、欠ける。

「俺も、あの先生好きだったんだよな……」

ふ、と緩められた口元に、水姫は何故か泣きたくなかった。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

笑うと、そのまま彼は絵の前に戻ろうとし、しかし止まって振り返った。

なんだろう、と首を傾げると少し言いよどんだ後、

彼は言った。

「中、入れば。どうせ夏休みは部活無いから」

それだけ言うと、彼は席へ戻る。

——ああ、そうか。

水姫は頬を緩め、目を細めると、ゆっくりと広く静かな部屋へ踏み込んだ。